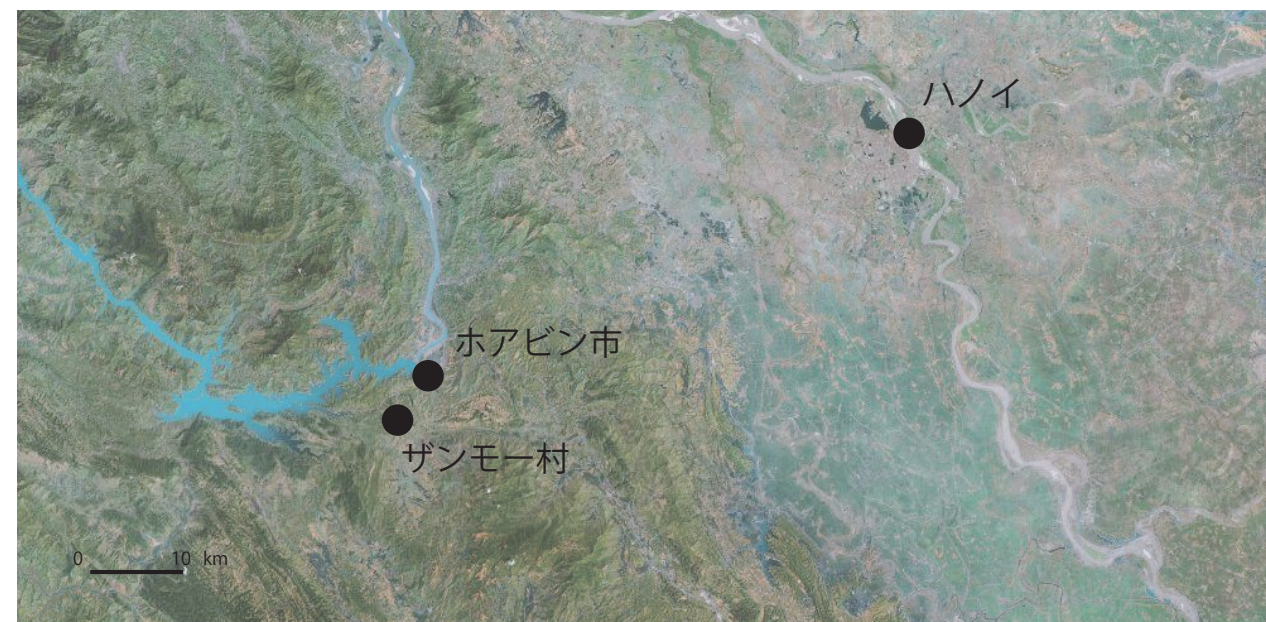


ベトナム北部少数民族観光村・ザンモーにおける実態調査

Survey of *Gian-Mo*, A Tourism Village of Ethnic Minority in the Northern Vietnam

はじめに

これまですでに継続的な調査研究を行ってきたベトナムにおいて、今回、北部の山間地域におもに住む少数民族の伝統的集落に焦点をあてることとした。すなわち、調査対象としたのは、ホアビン省の省都ホアビン市に隣接し、「観光村」として外国人観光客に開放されているムオン族の集落ザンモー村である。本調査研究は、近年当該集落の近郊でとみに活発化しつつある観光開発の枠組みのなかで、集落内部およびその周辺に遺されている豊かな文化的景観をいかにして保存し活用してゆくかについて考えてみようとする試みである。2006年7月の予備調査に引き続き、2007年8月、集落全体の現況とともに、民家の建築的な実態を把握するための現地調査が実施された。



ザンモー村の位置

出典：Google Earth

調査対象：ザンモー村

ザンモー村 *Ran Gian-Mo* は、首都ハノイから南西方に約80kmに位置し、ホアビン省の省都ホアビン市 *Hoa-Binh* に近接している。1市10県に行政区画されているホアビン省において、当該集落はカオ・フォン県 *Cao-Phong*、ピン・タン村 *Binh-Thanh* に属している。集落自体の成立時期についてはいまだ不詳であるが、行政的な意味で「村」となったのは、1954～55年頃とされる。ザンモー村は、ザン地区とモー地区に区別され、モー地区（地区全体で現在105家族が居住）はさらに2つの地区から構成され、調査した地区は第2地区 *Khu Lang Mo* で、40家族が居住しているという（1家族4～5人とされるので、住民は160～200人）。

当該地区の村人はすべてムオン族 *Muong* である。集落の人口は、経済的変化と核家族化が進んでいることなどから、少しずつ減少しているとされる。ムオン族は、当該のホアビン省と隣のタインホア省を中心に、約91万人（1989年国勢調査）が居住しているとされ、ベトナムにおける多数民族キン族との関係について定説はないが、最も近い民族とされ、ムオン族の文化のなかには古いベトナム人の文化が今も引き継がれているものがあるとされる。聞き取りによると、キン族などと同様、旧正月や9月初めの祝日などを祝う習慣はあるが、村特有の祭りはない。女性のなかには独特の腰巻きを着用する人がいる。

村における生業は農業で、水田における米作のほか、とうもろこし、サトウキビなどを収穫している。ただ、収穫された米は自給のためのもので（これだけでは不足で、多くの家で一部、米を購入している）、一部のとうもろこしやサトウキビが換金用とされている。かつては鶏や豚を飼育する家が多かったと言うが、現在はほとんどみることができない。またおもに使役用の牛も、集落内に数頭いるにすぎない。集落の周辺には1000～2000平方メートルの山林が集落の住民の所有とされ、そこではおもに竹の子が収穫され、重要な産物となっている。また、竹材は箆や爪楊枝の材料となるほか、一部の木材は用材として山から切り出されるという。

当該集落は、1979年～80年頃（1981年との聞き取りもある）から、「観光村」として、外国人旅行者に開放されている。村では「入村料」として一人5千ドンを徴収し、駐車場や道路の整備などの費用に充てているという（入村料はいったん、ホアビン市に納められている）。また、ひとり1泊5万ドン（食費は別）で外国人が、この村の民家に宿泊することも可能である。これまでにフランスやオランダなどのヨーロッパからの旅行者がおもであったようであるが、過去に日本人旅行者も宿泊している。



近隣の観光資源と観光化

ホアビン省は、近隣のニンビン省とタインホア省の2省を含めた広大なクックフォン国立公園を有し、山や湖などの風光明媚な景勝地が数多くあることで知られる。また、ダー河を堰き止めたホアビン・ダムはベトナムで最大規模の水力発電能力をもつだけでなく、ハノイの水源地として、また紅河デルタへの治水に極めて重要な役割を担っている。ここにも年間を通じて、多くの人々が訪れる。さらに、ハノイにより近い隣りのハータイ省にも、パーヴィー国立公園をはじめ多くの観光スポットが近接して点在することもある。近年、国家的施策によって自動車道路の整備が進められ、新たな文化的リゾートが開発されたり、また外国資本によるゴルフ・リゾートが開発されたり、急激で大規模な観光化がすでに現実化しつつある。

調査の背景と目的

資源を持たない開発国の多いアジアでは近年、観光収入に依存する傾向がみられるが、ヨーロッパなどに比べ、脆弱な基盤のうえにあるアジアの観光においては、過度な観光による住民生活への弊害や商業主義の横行など多くの負の影響やさまざまな深刻な困難が指摘されている。ベトナムにおいても、急速な経済発展を背景に首都ハノイでは、国際空港ターミナルが新たに建設され、市内の道路整備が急速に進んでいる。かつての鎖国に近い状況から一転して、アジア各地をはじめ世界から多くの人々が訪れる国際都市に変貌しつつある。これまで立ち遅れていた観光振興の施策についても、首相直轄の機関で検討され、その一部は急ピッチで実行されつつある。こうした都市部を震源とする経済発展や開発の影響は近年、農村部や山間部の集落にも波及している。54の民族から構成される多民族国家ベトナムにおいて、こうした観光化などの開発は、すなわち、多くの少数民族の住まいや集落に直結している問題なのである。しかし、観光開発にともなう様々

なインパクトについては、ほとんど認識されておらず、現状のままでは、開発優先となる可能性が極めて高く、多くの文化遺産や文化的景観の喪失が懸念される。

そこで、ハノイ首都圏に近接し、観光化をめざした開発が計画あるいは進行しつつあり、かつ、いまだ基盤整備が十分に進んでいない少数民族の山村集落を調査対象として選定し、以下のような目的をもって2006年7月以降、実態調査を行ってきた。すなわち、代々受け継がれてきた民家とその集積としての集落構成の実態について、おもに建築学的な観点から調査と分析を行ない、それらの建築的な特徴などを明らかにする。また住民の現代的なニーズについても調べ、それらをもとに将来の観光開発の影響を想定したうえで、建築的・景観的な構成や要素のなかから文化的な価値を有し後世に残すべきもの、観光にむけて活用すべきものなどを幾つかの文化的価値基準ごとに分類し、それぞれに具体的な保存・活用計画を策定することをめざす。



ザンモー村全景（北東面）



南西側の棚田

集落内の道



調査チーム（村長宅前で）

集落構成と民家建築

ザンモー村の集落は北東＝南西に連なる山並みに挟まれた谷状の地形のなかにあり、集落を挟んで北東側と南西側のそれぞれに住民が耕作する水田が広がる。集落より低い北東側から南西側にむかって、水田は棚田となって広がっている。ホアビン市につながる現在の道路は以前から変わることなく使われてきた道筋が継承されたもので、集落の北西側の山裾を通過している。その道路を南東方向に下り、公設の駐車場、2件ほどの民家と川筋を越える橋のかかる道が続く。この道筋は数箇所に分岐しながら、ほぼ等高線に続き、それに沿って40戸ほどの民家が房状に立地している。

それぞれの民家は高床式で、草葺きの屋根で覆われている。多くの民家はその棟を道筋に沿った方向、つまり北西＝南東方向に向けて建った入母屋造りで、妻側に木製階段を設けている。いくつかの民家では、台所ないし倉庫としての付属屋が主屋の背後に直交して設けられ、一部の床で繋がっている。基本的な平面と

して、2×3あるいは2×2に身舎柱を立て、その周囲に側柱を立て、間口4間ないし3間・奥行3間とする例が多い。妻側に階段を設け入口とし、入口とは反対側の中央柱間に先祖壇などを設け、その前を食事および居間として使う。接客は入口に近い側で、入口から最も遠い奥を寝所とする。奥の柱間ないし中央の柱間で、入口側の床面には炉が造られることが多い。いくつかの例では前述したように、別棟を主屋背後に設けて、そこに炉が備えられていた。架構には水平梁と束が使われるほか、斜梁あるいは合掌材が用いられている。架構形式によって、身舎柱や側柱が省略される例も多く見られる。床には現在、板材が用いられている例が多いが、竹材を割ったものが使われた例を若干みることができた。また、建物周囲は板による壁や窓が一般的であるが、一部に竹材を網代状に組んだものが見られた。床下は現在、舗装され、木材などの貯蔵スペースとなっているが、80年代までは豚や鶏が床下で飼われていたという。

山田 幸正

首都大学東京都市環境科学研究科建築学専攻
教授・博士（工学）

E-mail: yyamada@comp.metro-u.ac.jp

YAMADA Yukimasa

Professor, Dr.Eng.,
Tokyo Metropolitan University

URL: <http://www.eng.metro-u.ac.jp/yamadabal/>